

## 燕舞会の過去・現在・未来

第3期燕舞会会長 本澤 養樹

はじめに

燕舞会は今回の役員改選をもちまして第4期を迎えます。本会が2001年の発足以来、順調に活動を続けることができましたのは、ひとえに会員の皆様のご支援の賜物であると存じております。この間、会員名簿の整備、公式ホームページの立上げ、活動支援金制度の設立等、組織の充実に努めてまいりました、また、フォーメーションドレス、部旗、ゼッケンの寄贈など、会員有志による現役支援の窓口役を務めさせて頂きました。

私は僭越ながら会の設立準備段階から現在まで様々な形で本会の実務推進の一翼を担ってまいりましたが、いよいよ若い世代に引導を渡すべき時が来たと考えました。今回の改選をもって、代表委員会は本会の次世代への継承と更なる活性化を目指して舵を切ることを決定いたしました。今後の代表委員会は若く、コンパクトで、よりアクティブなタスクフォース（実行部隊）へと進化していくことになるはずで、私たち第一世代は本会の基盤づくりという役目を完了したと思っております。しかしこの機会に、これまでを振り返り、本会の将来に思いを馳せることで、後に続く人たちの道標とすることもまた、私の責任であると考え、ここに筆を執りました。

## なぜ私たちは燕舞会を立ち上げたのか

もともと本会が発足するはるか以前から、オール東工大にはOBOG会が存在しました。このOBOG会は最初から会長も固定した幹事も定めませんでした。毎年継続して活動をおこない、現役の協力を得て春の新入生歓迎ダンスパーティ、秋の新OBOG歓迎ダンスパーティが毎年定期的で開催されてきました。長きにわたってこのような組織が機能し続けたのは他校に例が無く、リベラルな東工大の面目躍如であったと思います。しかしその美点は意思決定システムを持たない弱みと表裏一体でした。パーティ以外のいかなる活動も、例えば他校の創部記念式典に会として祝電を打つことさえ非常に困難でした。

やがていつの間にか（今から約20年前だと思います）春のダンスパーティは事実上、卒年の若い世代だけの参加となり開催も不定期に、秋のダンスパーティは消滅しました。この間もクラブ黎明期の世代の方々は、独自の会合をおこなってききましたが、私たち当時の中間世代のOB、OGは帰るべき場所を失いました。そこで中間世代を主体とした非公式の集いを開催したこともありました。実際のところ近い世代だけで集まることは楽しいし、誰にも気兼ねせずに済みます。しかしOB、OGがそれぞれの世代だけで集えば、どの年代で区切っても、必ず誰かが世代の狭間に立たされることになり、結果的にその人の居場所を損なう事になります。私は中間世代の非公式の集いを主催して、初めてこのことに気付かされました。この経験から私にはOB、OGコミュニティを決して特定の世代で区切っては

ならない、という信念が生まれました。先に述べたとおり世代間の分断は始まっており、自然発生的な OBOG 会に全世代が参加することはもはや困難でした。このような状況の中で私たち本会の発起人一同は、2001年の OBOG 会創立 30 周年のタイミングが、統一 OBOG 会組織を立ち上げる最後のチャンスであると考えました。当時の全 OB、OG の約半数に御参加頂いた OBOG 会創立 30 周年記念パーティがあればほど大がかりであったのは、世代を縦断した統一組織である「燕舞会」の発足をすべての会員に宣言するために、どうしても必要であると考えたからでした。

本会の発足の時にもお話ししましたが、本会の理念は、時間と空間を超えて OB、OG の心と心を繋ぐことにあります。ひとりひとりの会員はそれぞれが現役部員として活動した時代も環境も異なり、時には親子よりも年齢が離れています。しかし普通なら何の接点も共通の話題を持ちえないであろう異なった世代であっても、学生ダンスという共通の原体験を共有し、同じように涙し、同じように喜びながら青春の一時期にダンスに真剣に向き合ったことをお互いに確かめることで、真の友人になることができると信じています。それが「燕舞会」の価値であり、この理念こそ、継承すべき本会の大きな財産のひとつだと考えています。

#### 女子医大問題の根底にあるもの

この 10 年間を振り返るとき、本会にとって負の歴史ではありますが、どうしても語り継がなければならない事として、女子医大問題があります。女子医大問題とは、本会の会員の一部および現役部員の一部が、数年間にわたって東京女子医大ボールルームダンシング部（以下女子医大と記す）の練習会、学園祭の発表会、合宿などの活動に恒常的に関与し、この活動の中で現役部員がダブルスクールおよびコーチまがいの行為を行っていたものです。この活動の発端は善意のボランティアであったと思われませんが、やがて関与者以外には緘口令が敷かれ、活動の事実は三校の活動からは隠匿されました。

本会は本件に会員が関与していたことを真摯に受け止め、直ちに事実関係の解明を行いました。結果的に本活動がダブルスクールの禁止という学連規定に抵触していることが明らかになり、本会会長の辞任、一部の現役部員の全日本戦欠場に至ったのは痛恨の極みでした。しかし、たとえいかなるルール違反が無くとも、かかる行為は共同加盟校（パートナー校）への隠し事として二重構造のクラブ活動をおこなったものであり、寸暇を惜しんで試合のために練習に励んだパートナー、チームメートをはじめ、共同加盟校三校の信頼関係と絆を揺るがす、許されざる行為であったと思います。

私の見方が一面的であるという批判もあるかもしれませんが、一部の会員から女子医大側を擁護する意見もありました。要約すれば女子医大は医学部特有の教育課程の関係で学連に

加盟できない、だから水面下で支援したのだ、といった論調です。しかし私は断言します。それは詭弁であると。ラグビーをはじめ多くのスポーツで医科大学リーグが存在し、対抗戦を定期的に行っています。その様な医科系学生競技団体の設立を女子医大側が望み、学連を通じ正式に協力を要請したのであれば、私たちは協力できたかもしれません。しかし、女子医大はそのような行動を一切取ることなく、東工大舞研の組織に言わば寄生する形で肥大化していきました。彼女たちは、オール東工大が心血を注いで行ってきた部員勧誘、後輩の指導、クラブ組織の維持運営には何一つ協力することなく、都合の良い時だけ自らの活動に東工大の部員を利用しました。これに悪意が無いというのなら、学連および燕舞会、オール東工大舞踏研究部に対する無知、無理解以外の何物でもありません。さらに女子医大からは、本会に対してもオール東工大舞研に対しても、問題発覚から現在まで、いかなる謝罪も説明もなかった事に私は言及しておきたいと思います。

私は現在でもすべてが解決したとは思っていません。この問題の根底にあったものは何だったのでしょうか？なぜ何年にもわたって部員が巻き込まれていったのでしょうか？…学生ダンスはインターカレッジ（大学間の対抗戦）であり、選手はクラブの代表です。ともすれば忘れがちなのですが、たとえ個人戦であっても、選手は大学名を背負うことで出場資格を得ています。クラブは競技で優れた成績を収める人、競技に出場する選手だけのものでは決してありません。新入生の勧誘からはじまり、合宿や練習会での指導、試合の準備や応援、飲みに行ったり、単位取得の相談に乗ったりでさえ、部員同士が関わり合う日々の行為すべてがクラブを支える大切な活動なのです。その当たり前前の行為の価値を共有し、すべてのメンバーが互いの存在意義を認めあった時に、クラブは初めてチームたり得るのだと思います。私はそれがクラブマンシップであると思います。根源的に人は誰しも他人から認められたいと願っている、と言われます。もし誰かがクラブの中で自分の存在を希薄なものと感じたら、その人は自分の存在意義をクラブの外に見出だそうとするかもしれません。体育会クラブの常として OB や上級生の発言や行動は、いい意味でも悪い意味でも下級生に大きな影響を与えます。もしもそのときに（真意はどうあれ）自分をスーパースターのように歓迎する別の世界の誘惑が目の前にあったとしたら、ましてやそれが OB や上級生からの誘いであったとしたら…思考停止に陥り、共同加盟校三校のクラブマンシップをどこかに忘れ去って、そこに没入しない保証はどこにもありません。クラブが個人主義に走り、OB がクラブマンシップを疎かにする行為に向かった時、危機は姿を変えて再び訪れるかもしれないのです。私は敢えて言いたい。この問題の本質は本会と東工大舞研のクラブマンシップが問われた、ということなのです。

#### 燕舞会はどこに行くのか

最後に本会の将来について考えてみたいと思います。共同加盟校三校の枠組、規模が今後とも変化しないと仮定すれば、本会の会員数は、最終的に 600～700 人の規模に収束していく

ものと思います。共同加盟校三校の卒業生が本会の唯一の人的な原資ですから、もし現役のクラブが途絶えれば、いずれ「燕舞会」も必ず消滅します。各校の末永い存続、発展を祈らずにられません。

伝承できるカルチャーもあれば、そうでないものもあります。どうしても伝承できないのは社会環境に依存する要素です。社会の変化によって学生ダンスも変化します。それゆえ本会の将来像は学連や、学生ダンスの将来の姿と無縁ではありません。クラブ黎明期の先輩方が競技ダンス主体のクラブとして、現在まで続く三校の枠組を構築した時代は、「社交ダンス」の黄金期でした。たとえクラブの活動が競技を主体としていても、ダンスパーティが学生共通のカルチャーであった時代であり、ダンスが文字どおり「社交（コミュニケーション）」で有りえた時代でした。部員はダンスパーティを通じて部外の一般学生との接点があり、クラブも認知されていました、だからこそ「二金会」という部員による講習会がクラブの活動の一環として成立していたのです。しかし時代とともに、ダンスという言葉は一般社会にとって「社交ダンス」を意味しなくなっていきました。「社交」ダンスが踊れるパーティは姿を消し、（もはや社交ではない）ボールルームダンスは競技選手だけのものになりました。言うなればボールルームダンスは学生の共通言語からスポーツへ変質したのです。二金会の終焉は残念ですが、時代の必然であったと思います。

ダンスが「社交」からスポーツへ変質したことで何が変わったのでしょうか？まず私たちは「一般学生は、もはやまったくボールルームダンスに関わらなくなった」ことを認識しなければなりません。大学生は今では舞研に入部しない限り、ダンスを見たり踊ったりする機会は無いです。しかし参加型スポーツではなくても「見るスポーツ」としてのダンスの認知度を上げることは可能なはずで、でもダンスやオール東工大舞研の活動、ひいては本会が学内や一般OB、OGから広く認知されるためには、今までとは異なる積極的な情報発信が必要でしょう。一例を挙げれば、現在、東工大の公式ウェブサイトから東工大舞研、あるいは本会に辿り着くことはできません（もちろん逆はできますが）。東工大が全日本などの大きな大会で、どんなに優れた成績を取めようと、今は学内の誰もそのことを知る由もないのです。もったいない事だと思いませんか？学内でクラブのプレゼンスが向上しなければ新入部員、つまり未来の本会会員は決して入ってきません。

では、今後ボールルームダンスがマイナースポーツからオリンピック種目のようなメジャースポーツへと「昇格」したらどうなるのでしょうか。学生ダンスは風俗営業法によって縛られ、ある意味、逆に守られてきました。他のスポーツと異なり、18歳にならなければプロから指導を受けることができず、さらに学連の自主規制も加わることにより、東工大のようにスポーツに特化した学生が入学しない大学も、イコール・コンディション（対等の条件）でスタートラインに立って競技に参加でき、（本人の努力次第ですが）チャンピオン

を目指すことが可能でした。そこに私たちの夢やモチベーションがありました（そうでないスポーツ、例えば野球と比べれば違いは歴然としています）。日本でも世界でも以前からダンスをオリンピック種目にとという動きはありました。（モスクワオリンピックの開催前には、学連もプレオリンピックに調査団を派遣したと思います。）皮肉なことですが私は東工大にとってオリンピック種目化は両刃の剣になり得ると思っています。もしもナショナルチームの強化選手がジュニア中心になるのなら、学連出身の選手は中途半端な存在になるかもしれません。あるいは学連から強化選手が選抜されるとすれば、学連加盟校間のイコール・コンディションも崩れていくでしょう。私たちにとってダンスがメジャースポーツへなるということは喜ばしい事である反面、学生ダンス（少なくとも東工大）がアマチュアのひとつの核たり得なくなる時代の到来を意味するかもしれません。現在、学連はオリンピック種目化の動きに対しては一定の距離を置いているかのように見えます。もともと学連のインターカレッジ競技スタイルは世界に例のない「ガラパゴス・システム」です。（この問題については昨年冬の全日本戦のプログラムで東大の浦 環先生もご指摘されています。）将来、学連はグローバルスタンダードに倣った競技団体を目指すのか、それとも今の枠組を守るのか、既に部外者である私たちは見守るしかありません。また学連のシャドーカップル制度の導入は時代の流れだと思いますが、カップルの共同加盟校の枠組の中での立ち位置、あるいは卒後の本会での位置づけは、将来の課題となるかもしれません。大学9月入学化の問題など、この瞬間も大学、そして学生ダンスはリアルタイムで変化を続けています。いずれ本会も今までとは少し異なったバックグラウンドを持つ会員を迎える時が来るでしょう。変化が大きければ大きいほど、私たちにはそれを受け入れていく懐の深さが求められます。その時こそ本会のクラブマンシップが問われるのだと思います。

#### おわりに

歳を取ると誰でも、「昔は良かった」と言いたくなります。私たちは時計の針を戻すことはできません。しかし徒に過去を懐かしみ、感傷に浸る必要もありません。会員の皆様、どうかもう一度試合に足を運んでください。あの時から変わったものよりも、変わらなかったものはるかに多いことに必ず気付かれると思います。学生ダンスは昔もすばらしかったが、今もすばらしい。そのことに気付いたとき、それだけで若い世代との接し方が変わり、見る目が変わります。燕舞会の役員を務めたこの10年間、私は何回か心が折れそうになりました。そのたび私を勇気づけたのは過去への感傷ではなく、現役諸君の真剣な眼差し、試合の時に見せる熱い涙でした。彼、彼女たちが、遠い日の思いに、もう一度普遍的な価値を与えてくれたのです。私は全ての現役諸君と、かつて現役であった会員の皆様にそのことを感謝いたします。ありがとうございました。

2013年1月26日 燕舞会総会にて発表